

パネルディスカッション

司会進行

大坂 郁夫

(北海道立総合研究機構 農業研究本部 酪農試験場天北支場 支場長)

パネラー

上田 宏一郎

(北海道大学 大学院 農学研究院 教授)

石田 亨

(元根釧農業試験場 研究部長)

丸藤牧場 丸藤 英介 (中川町 酪農家)

高原牧場 高原 弘雄 (天塩町 酪農家)

守谷牧場 守谷 学 (猿払村 酪農家)

テーマ「これからの道北酪農における放牧酪農の可能性」

～様々な放牧モデルの可能性や課題を議論し、道北地域における

今後の酪農の方向性と放牧酪農の普及推進について考える～

○パネラー

| 上田 宏一郎 | | 石田 亨 | |
|---|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・放牧の研究 ・自給粗飼料や土地基盤に基づいた家畜生産が草食家畜のあるべき姿 | | <ul style="list-style-type: none"> ・放牧の試験を試験場で実施 ・農家に放牧への転換の助言 ・退職後は、浜中町から依頼され、放牧巡回を行っている | |
| 丸藤牧場 | 高原牧場 | 守谷牧場 | |
| ○道北地域での放牧酪農 | ○道北地域での放牧酪農 | ○道北地域での放牧酪農 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・土地が安い ・土壌凍結がなく、ペレニアルライグラスの生育に適している | <ul style="list-style-type: none"> ・就農時、資金面等で放牧しか選択がなかった ・放牧に適した牧草種が適した地域 | <ul style="list-style-type: none"> ・昔、つなぎ飼い + 中牧区放牧 ・労働力不足で、現在の形態に変更 | |
| ○放牧システム | ○放牧システム | ○放牧システム | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・大牧区放牧 + ローテーション放牧 | <ul style="list-style-type: none"> ・集約放牧 + 小牧区放牧 | <ul style="list-style-type: none"> ・中～大牧区放牧 + 集約放牧 + TMR | |
| ○飼養形式 | ○飼養形式 | ○飼養形式 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・フリーストール 40頭 | <ul style="list-style-type: none"> ・つなぎ牛舎 40頭 | <ul style="list-style-type: none"> ・フリーストール 80頭 | |
| ○規模拡大の予定 | ○規模拡大の予定 | ○規模拡大の理由 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・上限46頭 ※施設上限のため | <ul style="list-style-type: none"> ・施設を増棟しなければ、現状維持 | <ul style="list-style-type: none"> ・労働力低下 ・つなぎ飼いでは限界 ・投資し、システム転換 | |

○「放牧+搾ロボ」の投資と償還

酪農試験場からの回答

根釧農試のパンフレットにあるような、放牧主体（？）+搾ロボの組合せ

当初、フリーストールで、約50頭の放牧

その後、搾ロボ+アブレストパーラーで、約80頭まで拡大

- ・投資金額 約1億円（約10年前の投資で）
- ・償還 7年（拡大して増えた所得を回収に回した場合）
※1980年頃の乳価で、約9年で償還
- ・労働時間 「50頭+放牧+つなぎ飼い」よりも時間は半減する
- ・結論

放牧に何を求めるかによるが、家族労働で人員が少ない状態でも、奥さんが楽になるのが、一つの有効な選択肢でもある。

放牧のメリットを何にするのかは十分に検討する必要はある。

道北は、建築コストが近年でも高いため、導入するには高い壁となっている。

○共同で大規模な放牧酪農の可能性（会場からの質問）

クラスター事業で搾ロボのメガファームを計画し、地域単位で放牧する部門の支場などを計画する。

冬はメガファームで一括管理、夏はいくつかの支場で放牧し、搾ロボ施設移動させ搾乳をするような構想も良いかもしれない。

実際、ヨーロッパの移動型パーラーも普及されていることから可能かもしれない。

例えば、搾ロボを導入し空いた時間を乳製品を製作するなどを考えれば現実的かと。

また、若い人も入れて多様な放牧主体の酪農形態も良いかと思う。

○道北地域で規模拡大はあるのか（司会から会場に質問）

稚内市や豊富町では、ほとんどがつなぎ飼い牛舎が多く、40～60頭規模で規模拡大をせず、コストを下げて、所得を上げるような酪農家が多い。

また、家族経営で、保有している草地を効率よく利用する方法が多く、投資しながら規模拡大するのは難しい状態です。

○まとめ

今回の道北地区を考えるにあたり、放牧に対して、違うやり方の3人からの意見を聞き、道北地域の放牧は、草を利用するには良い場所であることを再認識できました。

北海道全体は酪農王国ではありますが、道北地域の特色として、放牧酪農を意識していたきつつ、道北地域の中でも、それぞれの地域において、粗飼料や放牧地に合った放牧ができるような仕組みができればと思っています。